

## 年間第30主日

マルコ10・46-52

2015.10.24

カトリック高円寺教会  
呉 大一(オ デイル)神父

ヘレン・ケラーは『3日間だけ目が見えたなら』という本で、もし自分が3日間見ることができたら何をしたいのかを挙げています。まず、最初の日には自分自身を教えてくれたサリバン先生の顔を見たいし、二日目は早起きして差し上る朝日を見て、夕方には艶やかに輝く空の星を見たいし、最後の三日目には朝早く大通りに出て足早に出勤する人々の活気に満ちた表情を見て、お昼は美しい映画を見て、夕方には派手なネオンサインとショーウィンドウの商品を見て、家に帰ってきて、三日間、目が見えるようにして下さった神様に感謝の祈りをささげたいと記録しました。

ところが、ヘレン・ケラーがしたいことは、すべてわたしたちが常にすることができる、あまりにも平凡なものです。そうならば、わたしたちは毎日の生活の中でどれほど感謝をしながら生きているのでしょうか？ わたしたちが生きながら、感謝すべきことが沢山あるにもかかわらず、平気で感謝していないのはなぜでしょうか？ それは見るべきもの全てを十分に見ていないからです。

わたしたちが何かに執着するようになると、それに役立つことだけに目を向けるようになり、それ以外のものには目から遠くなってしまいます。欲張りの実業家が金儲けに関わっていないことには無関心であるように、執着している対象以外のものには何の興味もありません。だから、神様、真理、美しさ、善のようなものには目が遠くなるようになります。

ところで、わたしたちがイエス様に従うためには、何よりも正しく見るということが大事です。真の愛は、誰も排除しないことであって、わたしたちが一定の物事や人物だけにしがみついているとすれば、誰かを真に愛することはできなくなるからであります。

したがって、わたしたちは、まずわたしたち自身が盲人であることを謙虚に認めなければなりません。自分が盲人であることを認めることによって、わたしたちは他の人とむやみに接することはできないし、初めてわたしたちは神様にこう求めることができます。「主よ、私を憐れんでください」。

たとえ信仰が弱くて、多くの罪を犯しているとしても、真に悔い改めをして主のゆるしを願って、再び堅い信仰をもって主の慈しみを懇願しなければなりません。

今日の福音でも、バルティマイという盲目の物乞いは、多くの人が叱りつけて黙らせようとしたが、それに気にせず大声で叫びます。「ダビデの子イエスよ、わたしを憐れんでください」。この盲目の物乞いの執拗で粘り強い懇願に、イエス様も足を止めて彼に尋ねます。「何をしてほしいのか」。

それならば、わたしたちは神に果たして何を求めているのでしょうか？ 経済的な余裕、子供の名門学校への進学や良い仕事への就職、夫の昇進、魅力的なフィットネス、人々からの認定など。ところで、これらが本当にわたしたちに必要なのでしょうか？

イエス様は、「あなたが望むことは何なのか」と問わず、「あなたはわたしに何をしてほしいのか」と尋ねられました。したがって、わたしたちは、自分が望むのではなく、イエス様がわたしたちに与えたいことを求めるべきです。もしイエスに懇願したが、まだそのことを見つけることができなかつたのなら、ただ、今日の福音の盲人の物乞いのように求めなさい。「主よ、目が見えるようになりたいのです」。

今までは一定の物事や人なしでは幸せになれないと信じて、そこだけを見て執着して生きてきたのですが、これからは世の中と神様を眺めることができるように助けてください。

わたしに失望を抱かせた隣人たち、痛みあるわたしの人生の出来事、わたしの周りのすべてのものの中で、再び愛と希望を感じるができるように助けてください。

すべてのものの中で神様を見て、神様の中ですべてのものを見ることができるよう助けてください。